

どれみなのはなし

そのはち



もくじ

まえがき

ひとみ	3
しゃしんき	3
よなかのシヨウタイム	12

はじめまして、もしくは、おひさしぶりです。

「おジャ魔女どれみ」終了後初の『てんこ』がつかないどれみ本です。

文芸に戻るんじゃないのかなかったのか？とも言われてたりしますが、まだまだどれみ本です。

でもって やっぱり、恥ずかしい断書いております。苦手な方はこのまま本を閉じて下さいね。

準備はよろしいですか？

それでは『どれみはなし』そのはち。しばらくの間お付き合いくださいませ。

酒処 金井亭亭主 猫好敬白

イラストレーション……久遠一海

3 ひとみ しゃしんき

ひとみ しゃしんき

「ほな、おとうちゃん、おかあちゃん、
またあとでな〜」

手えふりながら、ふたりがタクシーに乗り込む
を見送って。あたしはようやくひとりでになった。
手に持ってた卒業証書、さっきふりすぎたんで頭
が出てしもてん。ぎゅつ、と押しこんで、と。

ふう。ずいぶん遅れてもうたな。これから八
ナちゃんとミミたち見送りにMAHO堂行かなあか
ん、うちゆうのに。

あゝあ、どれみちゃんたち、みんな先行ってしも
たみたいや。

そう思いながら校門のところで歩いて行ったら、
「あら？遅かったわね」

って声。

あれっ、と思て振り向いたら、背えの低い子がひ
とり。Gパンにシャツ着て、ぼうしかぶって、サン
グラスかけた

「おんぶちゃんやんか。そのかつこ 逃げてきた
んか？」

「ふふ、まあね。卒業式は、みんな撮りたがるから。
あいちゃんは どうして？」

サングラスをちょいとおデコに上げて、おんぶちゃ
んがあたし見てる。まあ、普通はこんな遅くなら
へんわな。

のぶちゃんやらクラスのみんなやらにつかまって、
大変やったんけどなあ。最後やから握手、とか、囲
まれて泣かれてとか

うちのクラスで遠くに行くくんはあたしだけやし、去
年からアメリカ行く言うてたももちゃんと違って、あ
たしが大阪行くちゆうんはあんま言うてへんかった
から、しゃあないんやろけど。

「なんや色々泣かれてしもてなあ」

思い出して苦笑いしながらそれだけ言つたら、

「あいちゃん、もてもてだもんね」

おんぶちゃんも、くすくす笑てる　　なんや、見

てたんやないか。人が悪いなあ。

「まあええわ。みんな待つてるやろ、いつしよ行こか」

「そついえば、大阪へはいつ行くの？」

学校前の坂をもうじき降りきる、つちゅう頃、お

んぶちゃんが言つた。

「あ、言うてへんかった？　来週の終わりや。もも

ちゃんがアメリカに行くんは、なんとか見送れるんや

けどなあ」

「そつか。もう、ほんとにお別れなんだね」

下向いてもうたおんぶちゃんの顔見ながら、あ

しは頭かいて、

「おんぶちゃんの引越しは手伝えへん。かんに
んなあ」

引越しは月末や言つてたもんなあ。できたら行き
たいんやけど

「飛行機で行くももちゃんは仕方ないけど、あいちゃ
んまで来てくれないなんて」

ああ、顔を手えでつつんでしもた。そんなん言つ
たかて　あん？　いま、ちよつと口もとふくらまし
てん。こおらつそ泣きやな。

「おい　もう、おんぶちゃんまでMAHO堂に
閉じこもつたりせんといてや？　あたしがファンか
らボコボコにされてまうわ」

ほんほん、つと背中たたいて、げんこで軽くあた
まコツンツ、てやつたら、おんぶちゃんが苦笑いし
ながら舌だした。

「エへ　ごめん」

つたく　けど、ちよつと楽になつたわ。おおき
に、おんぶちゃん。

「ね、ちよつと遠回りしてみない?」

あたしの前にまわってきたおんぶちゃんが、腰かがめて見上げてん。な〜んかたくらんでる気がするけど

「ん〜 どれみちゃんたち先行ってしもたみたいやし、まあええか」

「それじゃ、美空町一周ツアー! コンダクターはわたし、瀬川おんぶです♡」

とたんに元気なチャイドル口調になってん。

そやな。MAHO堂行く前に、もうちょい元気ためとかんと。

美空町の公園。あたしがこの町を、最初に見わたした鉄棒。すべり台。砂場のまわりに広い林と草むらでも、いまはあたしらがやない、小さな子供が遊んでる。

「いろいろ、あつたよね」

おんぶちゃんがそう言いながら、あたしの横を歩いてった。まっすぐ、草むらのほうに向かつてる。

「どこいくんや?」

早足で追いかけてったら、いきなり立ち止まっしてもた。

「うぶっ!」

あだだ 背中にぶつかってもうたやんか。ちいと文句言つたる思て顔上げたら、おんぶちゃんが、草むらの方指差してん。

「ここ、覚えてる?」

「ここ、公園のわきにある、ただの草むらやん。わけわからんでいと、おんぶちゃんが顔だけこっち向いた。

「3年前、間違えメールで集まっちゃった人たちの心を変えようとしてたわたしを、あいちゃんが止めてくれたの」

ああ そういえば、そんなこともあつたわなあ。

「思い出した？」

わたしは、忘れないわ。あいちゃんが体をはって止めてくれたの。心を変えられる人たちじゃなくて、わたしのことを心配してくれたの」

いや、そう　　やったんかもしれへんけど、それ真顔で言われると

「あは♡ あいちゃん、顔まっ赤よ」

「体ごとこつち向いたおんぶちゃんが、あたし指差して笑ってん。」

「もう！ からかわんといて!!」

ぷいっ、と背中向けて、そのまま歩つとつたら、

「ごめん、ごめん。待ってよ♡」

笑いながら追いかけてくる気配感じながら、3年前のこと、今ごろになって思い出したわ。そや、公園の草むらかて、思い出あつたんや。

小さなハナちゃん乗ったベビーカー押して歩いた小道、バッドアイテムを探し回った商店街

この町で思い出のない場所なんて、ないんかも知れへんなあ

「最初のお別れは、ハナちゃんと口口たちね」

商店街に入ったところ、おんぶちゃんがぼつん、と言った。あたしはそつち見ないでうなずいて、

「マジヨリカにララモヤ」

考えてると、ちよつと寂しなってしもた。

「あいちゃん。なに考えてるの?」

ん? おんぶちゃんの目が、小さく笑ってる。

そか。

「おんぶちゃんと、おんなじことや」

おんぶちゃんがこつち向いて、大きくうなずいてん。

「そつよね。わたしたちはこれから会えるけど、ハナちゃんたちとは、こんどいつ会えるのかな」

ああ、考えただけで寂しなるいつんに　　ふう。

「5年後かも、10年後かも知れへん。ひよつとしたら、生きてるうちにはもう会われへんかもな」

「そうね」

「はあ。口に出したら、もっと寂しくなってもた。なんか元気になること言いたいんやけど、のどまで出てきてすぐ引っ込んでまう。」

「なんとかせななあ、思いながら歩っていると、おんぶちゃんが立ち止まった。」

「ねえ、ちよつとそこ、行ってみない?」

「そこ、て ああ、よく寄り道したコンビニヤ。そやけど、」

「ちよ、ちよい待ちや。いつくらなんでも、買い食いまでしとつたら、どれみちゃん怒んで!」

「それでなくても、どれみちゃん、食べものの匂いに敏感なんやから」

「そうじゃないわ。いいから、ね♡」

「コンビニに入って、ひとまわりして、なんも買わずにそのまま出て。それでも、おんぶちゃんはコンビニながめてた。」

「どないしてん?」

「あたしが声かけると、顔だけちよつとこっち見て、」

「ね、わたしのママがアイドルだったころ、覚えてる?」

「おんぶちゃんのおかあちゃん? ああ、思い出したわ。」

「20年前に行ったときのことやな?」

「おんぶちゃんがうんうん、てうなずいて、」

「みんな違ってたよね。電話は押さないで回してたし」

「そやったなあ。なんや、映画のセットん中入ったみたいやった。」

「ポストも、なんや丸っこかったしなあ」

「そう。このコンビニも、酒屋さんだった

いま見てるものも、何年かしたら変わったちゃうのね」

おんぶちゃんは、まっすぐコンビニ見つめてる。サングラスで目がわからへんけど。

「せや。あたしも、大阪行きたびそう思うわ。4年前いたところが、どんどん変わっていくねん」

「そう。そうね」

はず向かいの郵便局や、奥のCDショップを見まわしながら、おんぶちゃんの言葉が、涙声になってん。

「あたしな、さつきからずっと、ハナちゃんとはもう会えへん、て考えてた。他のみんなには会えるけど、ハナちゃんやミミには てな」

せや。いま、はつきりわかったわ。魔女界に帰ってまうみんなとお別れは、耐えられるんかわからへん。それが怖かったんや。

最後の最後で、ちゃんとお別れできるかわからへん。そやから、おんぶちゃんと一緒に遠回りして、ちよつとでも先のばししてるんや。そやけど

「そやけど、ちゃうねん。ハナちゃんたちだけやない。あたしらがいま見てるもん、このコンビニも、小学校も、目の前にいるおんぶちゃんかて同じや。いまのみんな、もう会えへんものなんや」

おんぶちゃんのサングラスに、涙がたまってる。あたしは、コンビニのわきの階段まで、おんぶちゃん引つ張ってた。

「あいちゃんは、泣かれるばっかりね」

涙声のまま見上げるおんぶちゃんに、あたしはうなずいてた。

「ああ、あたしは泣かへん」

あたしの声、おかしなってる。ほおがこわばってるのわかるわ。

「な、おんぶちゃん」

「うん？」

すうつ、て息吸うとると、鼻のあたりがなんや水っぽくなってる。まだや。まだ早い。

「これからいっぱいお別れせなあかんやろ？」

「うん」

目の奥が、熱うなってきた。しっかりせな。

「それにいちいち泣いたら、みんなたまらんわ。そやから、あたしは決めた」

「なにを？」

口が震えてきてん。もう、ちよつとだけ！

「これからみんな見送っても、見送られても、絶対泣かへん。笑つてお別れや」

「」

「せやから、せやから 今だけ、な？」

「うん」

うなずいてるおんぶちゃんの顔を見たたん、あたしは首つたまに抱きついてた。

もう涙が止まらへん。泣き声も止まらへん。ただぎゅつて抱きしめて、肩ぬらすしかあらへん。

「わたしも、いい？」

「ん。あつたりまえ やんか」

おなががぎゅつ、としまつて、肩のあたりが熱う

なつてく。あたしは、この熱いもん忘れたない。

いんや、忘れへん。絶対！

小ちゃい公園で顔あらつて、あたしらはまた歩つてた。

ようやつとMAHO堂の坂が見えてきて、さあ行こかつちゆうとき、あたしの肩がぎゅつとつかまれてん。なんや？ 思てたら、目の前におんぶちゃんが回つてきとつた。

「なにしとんねや？」

「ふふ。こうして、ね」

顔近づけて、じゅつとあたし見てん。なんや、恥ずかしなつてきたわ。そしたら、いきなり目をぎゅつ、て閉じて、また開いた。

「ほら、おぼえた」

なんや？

「何年か、何十年かたつてから、またこつするの」

「何年か 何十年か ?」

おんぶちゃんの言葉、くりかえして見る。なんや、ようわからへん。

「そ、お姉さんになつたあいちゃん。お母さんになつたあいちゃん。おばあちゃんになつたあいちゃん。みんな、みんなおぼえておくの。そしたらいつでも、いまに会えるわ」

お姉ちゃん、お母ちゃん、おばあちゃんになつたおんぶちゃん、かあ

「そやな。あたしもやつてみよ」

今度はあたしが、おんぶちゃんの顔に近づいて

「ほいで、ぎゅっ」と

ちゅ♡

「!?」

びっくりして目え開けたら、おんぶちゃんが笑うてた。

「この方が、はつきりおぼえられるでしょ?」

やっぱ、おんぶちゃんにはかなんなあ。もう、笑うしかあれへん。これなら、元氣に見送れそうや。

「お姉さんになつても、お母さんになつても、おばあちゃんになつても、またおぼえよ。ね?」

せやけど、おんぶちゃんの顔見てたら、もちよつと元氣欲しなつてきたわ。

「おんぶちゃん、いま、もつかいおぼえたつて」

「うん」

「マジヨリカの言うこと、よく聞いてね」

MAHO堂の奥、魔女界の扉の前。ハナちゃんたちの見送りに、あたしらもなんとか間に合つた。

おんぶちゃんが着替える間、みんなに囲まれてぶつくさ言われたけど、まあええわ。

「あ、それから! おやつのまえにはちゃんと手を

洗って
「

あたしは、どれみちゃんの肩にぼんっ、て手えか
けて、言葉とめたった。

「そろそろ、行くぞ」

マジヨリカの声も、いつもより固なってる。

「ハナちゃん、早く立派な女王様になって、ぜったい会いに来るからね！」

さよならは、言わないよ」

ハナちゃん、もうじゅうぶん立派やで。そう心ん
中で言いながら、おんぶちゃんと目を合わせてうな
ずいた。

おんぶちゃんの右手が、あたしの左手と重なってる。

「それじゃあのお」

マジヨリカの声に、ハナちゃんがついてく。その瞬
間、左手を調子に合わせて軽く握って、せえ、の

ぎゅっ！

ひとみの奥に、大きなハナちゃんが写った。

「ハナちゃん！」

少しだけ、時間をかけてから目え開いたら、ハナ
ちゃんが小さくなっていく。

「いままで いっぱいいっぱい、ありがとう」

もいちど、ぎゅっ！

もう忘れへん。いつかもし会えたら、またこうやっ
て写すんや。お姉ちゃんになったハナちゃん、いつ
か、きつと。

わきを見たら、おんぶちゃんがこっち向いてうな
ずいとった。泣きそうになりながら、それでも笑っ
てた。

あたしも笑って、目えつむった。この顔も写しとく
んや、ひとみに。

ぎゅっ、♡

よなかのシヨウタイム

ああ 行っちゃったなあ

ハナちゃんとマジヨリカやドドたち見送って、MAHO堂からの帰り道。みんなでワイワイしゃべってるけど、やっぱり、まだ後ろ向いちゃうなあ。

「ねえ、どれみちゃん」

からだ半分MAHO堂の方に向いてたあたしが急いで振り返ると、目の前でおんぷちゃんがどアップになつてた。

「な！な、な、なに？おんぷちゃん??」

あわてて、ぱつ、つと離れたら、みんながこつちみて笑つてた。あちゃ。あたしだけ、ぼくつとしてたのかあ。

「あさつては何の日か、覚えてる?」

おんぷちゃんがまた近寄って、あたしの目をのぞきこんでる。あさつて? って、きょうが3月の

1日だから あ。あああつ!!

「そっか！おんぷちゃんの誕生日、あさつてなんだっけ!!」

あつちやあ。卒業のことであたまいっぱいだつたから、すうつかり忘れてた。

「今年のBirthday、お仕事オフなんだつて」

「だから、パーティどこでやったらいいかしら、って話してたのよ」

ももちゃんとはづきちゃんが、あたしの周りに寄ってきた。そっか、忘れてたのあたしだけなんだ。だめだなあ、って頭軽く叩いてから、なんか変だな、って思った。だつてさ、

「考えなくたって大丈夫じゃん。あたしたちには、おつきなパーティ会場があるんだから」

あれ? なんていきなり、しゅんとしちゃったの??

「な? あたしの言った通りやる?」

みんなの後ろでつで組んでたあいちゃんが、頭の

後ろに両手回してため息ついてる。やれやれ、って感じで。あたし、なんか変なこと言ったかな？

そう考えてたら、あたしの肩に、ぽんっ、と手が乗ってきた。見たらはつきちゃんが、顔近づけて、

「どれみちゃん、もう魔女界は使えないのよ？」

え？

ちよっとの間、あたしは何がなんだかわからなくなつた。パーティの会場だつたら、いつだって使えるMAHO堂のとびらの向こう側　　が魔女界で、それが使えなくて　　あ、そっか!!

「ちよ、ちよっと、どこいくの!!」

おんぶちゃんの声が背中から飛んできたけど、かまってるらない。だって、今だつたら

「あと2日だけ、魔女界のとびら開けといってもらつてくるっ!!」

「くらくらくらくら、待たんかいくらあゝっ!!」
くえっ。いきなりおながが苦しくなつて、あたし

はそれ以上走れなくなつちやつた。振り向いたら、あいちちゃんがしがみついている。

「そんなん言うたら、ハナちゃんたち困つてまうやんか!!」

そのままがっしり、肩つかんできたあいちちゃん目、じつとのぞいてみた。そしたら、ちよっとだけ落ち着いたみたい。考えて、その手をよいしょ、つて持ち上げて、

「やっぱ、もどる」

「まだ言っんかい!!」

にらんでる目が、よく見たら心配そうだよ。しかたないか。昼間がアレだったもんね。

「魔女界行けなくなつたつて、まだあるじゃん。MAHO堂」

あたしが言つたら、あいちちゃん、きよとん、してる。やだなあ、もう忘れちゃつたの？

「だからさ、改装するんだよ!! 4年前みたいに!!」
追いかけてきたはつきちゃんが、あいちちゃんと顔

見合わせて笑ってる。

うん これなら、だいじょぶ！

「あたしたちで、もっかい、もっかいだけつくっちゃ
お！ あたしたちの、MAHO堂!!」

「あらためて見る下、すっごいネ」

戻ってきたMAHO堂の中、ももちゃんがめずらしそうに見回してる。うす暗いMAHO堂。4年前にマジヨリカたちに会ったときにもどつたみたい。もう、ヨロイヤ変なかざりはないけど

「テーブルといすはあるのね。それじゃあ、テーブルクロスやカーテンの生地はわたしが持つてくるわ」
はづきちゃんがテーブルの大きさを計ってる。あたしも手伝おうとしたら、奥のほうから声がした。

「みんな、ちよい来てみい!!」

あいちゃんだ。いつの間に奥行つたんだろ？

あたしたちが声のほうに歩いてくと、見慣れたものが見えてきた。

「Wow! キッチンちゃんと残ってるわ!」

ほんとだ。みんな4年前にもどっちゃったと思つてたのに、ここだけ違うんだ。クッキングストープに流し台に その奥にあいちゃんが立ってる。

「どしたの、あいちゃん?」

キッチンのあいちゃんは、あたしたちを見ながらツン、ツン、って背中を指さした。

「冷蔵庫? あ、ちゃんと動いてるんだ」

「ちゃう、て。これや、これ」

これ、って あ、なんかメモ紙が貼つてある。あたしはもちよつと近よつて、よく見てみた。

「なにになに、え」と

え。『冷蔵庫は3日まで置いておく。中身は好きに使
マジヨリカ』 マジヨリカあ!?!」

い、いつ用意したんだろ。こんなもの。

片付けてたときにはなかつたけどなあ、って思いながら冷蔵庫のドア開けたとたん、みんなの動きが止まった。

「Unbelievable」

うん。あたしは思わずうなづいちゃった。もちちゃんん言うてる言葉はわかんないけど、意味ならわかるよ。おっきな冷蔵庫に、あふれるくらい食べ物つめ込まれてんの見ちゃったら、みんなそう思うから。

「あ ああ、ここにもメモ貼ってあんで」
「あいちちゃんの声、なんか遠くに聞こえる。メモ？」
「ええ〜とお」

『残ったらあたしたちが使う。あとは心配するな。マジヨルカ』 やて。みんなお見通しやな」
なんだかな〜って思ってる、後ろからくすくす笑い声。みんなが振り返ったり、おんぶちゃんがキッチン入ってきて

「マジヨリカもマジヨルカも、わたしたちがMAHO堂でパーティしなかったら、どうするつもりだっ

たのかしらね?」

「きつと、考えてもないわ。そんなこと」

はづきちゃんのひとことで、みんな大笑い。そうだね。マジヨリカだったらすうかも。

「よっしや、もちちゃんはケーキ頼むわ! 料理はあたしが作つたる!」

あいちちゃん、ノリノリだ♡ うんうん。こんだけ材料あるんだもん、なんでも作れるよね。もちろん、ステーキも つと。おんぶちゃんの誕生日だっけ。がまんがまん。

「 ああ、そっぴやおんぶちゃん。あさって、何時ぐらいから来れるんや?」

え? あ、そっか。
「オフっていつても、昼はパパやママがお客さま招待してパーティだから 夜になっちゃうわね」

おんぶちゃんが残念そうな顔してる。はづきちゃんとももちちゃんも、顔見合わせてさびしそうな顔。けど、しかたないよね。あたしただけのおんぶちゃ

んじゃないんだから。

でもー！

「じゃ、夜はだいたいしょぶなんだね？ だったら、あと二日もあるんじゃない いっぱい準備しよ」

みんなの顔、ちよつと明るくなった。そうそう、せつかくの誕生日だもん。がんばらなくちゃ。

「うん、お願いね。その代わり、わたしも何か用意してやるから」

あれ？ なんだかおんぶちゃんの声も楽しそう。でも、用意？

「用意って？」

首かしげてるあたしたち見ながら、おんぶちゃん口にゆび当ててた。

「ふふふ。な・い・し・よ」

「う ふあああ」

いつのまにか、目の前が明るいや。あゝ、よく寝た。

学校がない、って思つと、ついつい寝ちゃうなあ。うるさいばっかも学校だし もちよつと、「ロロロ」

口してよ。

「どれみ、いつまで寝てるのぉ？ 起きなさい！」
おかあさんの声が聞こえる。けど、気にしない気にしない。ふああゝああ

「ほら、どれみ!!」

え？ う、うあ、わあっ!! 目の前がぐるんつ、と一回転。気がついたら、あたしは床から、おかあさんのスカート見てた。

「いつくら春休み長いからって、寝っぱなしは許しません！」

えゝ けち。

「ん？ なんか言った!？」

あわわわわ！ 考えただけなのに、カンいいなあ、もう。 あれ？ なんだろ、じつと見ちゃって？

「どうかしたの?」

そしたらおかあさん、急に「ニコニコしちゃって、

「べつに」

な〜んか、あやしいなあ。

「そんなことより 明日のパーティの準備行くんでしょ? みんな待たしちゃうダメじゃない。ほら、起きた起きた!」

あ、いつけない。はつきちゃんたち、もう行ってるよね。

「まったくもつ もう小学生じゃないんだから、一人で着替えなさい よつと!」

ブツブツ言いながら、あたしのパジャマはぎとつてく。 ちよつと寒いな。でも、おかげで目がさめたよ。

すぐ着替えたあたしは、台所のジャム付きパンかじりながら、そのままMAHO堂に駆け出してみた。

ちらつ、て後ろ向いたら、おかあさんが手を振ってる。 やっぱ変だな。準備っていつてもパーティなの

に、そんな見送りなんて あれ? そう言えば うわっ!

「お、おとつとつとつ わっ!」

あたたた 足もつれて、すっころんじやった。よそ見しながら走ったりするからだよ。こんなとこ、ハナちゃんに見られたらなんて言われるか

つて、そうじゃないよ! いま、なんか考えてて、足がおるすになつちやつたんだ。なに考えてたんだっけ あ。

「パーティのこと、おかあさんに言ったっけ、あたし?」

あちゃ。遅くなつちやつた。

MAHO堂のドアの前まで来たけど、ちよつと入りにくいなあ。

ドアベルなくなっちゃったし、ドアノブゆ〜っくり回して、そ〜つと中のぞき込めば あれ？ なんか目の前に光るものが見え

「どおおおれえみいいちゃあぁん〜」

どおわあぁあつ！！ な、なに？ 光るものがせまつてくるつっ！?

「ひどいわどれみちゃん！ MAHO堂わたしたちで作ろつって言ったのに！」

あ、あぁ、はづきちゃんか。びっくりした。

「ごめんごめん。学校ないからつい寝坊しちゃってさ。」

ドアを背中で閉めながら両手合わせてペ〜コ〜コ〜。ふう、ってひとつため息の音がしたんで、チロっ、て片目あけてみたら、はづきちゃん、じいっとあたし見てる。でも怒ってるかお じゃないな。なんだろ？

「ね、どれみちゃん。パパやママの様子、変じゃなかった？」

へ？ なんて知ってるの？

「うん。おかあさんが、ちよつとへんなんだよねえ」

「どんな風？」

すいっ、とはづきちゃんが近づいた。手にカーテン生地持って。あたしは、閉めたばっかのドアにへばりつきながら、

「『ゴロゴロしてないで、さっさとパーティの準備行きなさい！』とかき。パーティのことなんて言っていないはずなんだけどなぁ」

「そう」

考えごとしてるはずきちゃんの手元が、きらっ、て光った。よく見たら げー！

「あ、あの、はづきさん？ 手元のカーテンから、針が出てるように見えるんですけど 気のせい？」

はづきちゃんの目があたしとカーテンを何度か見て、そのままカーテンごと後ろにジャンプした。

ふう。あ、でも、さっきの言い方って、

「もしかして、はづきちゃんちも？」

カーテンを指でなぞりながら針抜いてるはつきちゃん
んが、こつちに向き直った。

「ええ。なんだかそわそわしちゃって、いつもより
わたしに構ってくるのよ。ばあやも止めようとしな
いし あいたっ！」

しまった、余計なこと言っちゃった！あわてては
つきちゃんの指見に行こうとしたら、途中で足がず
るっと。倒れた目の前にカーテンが

「痛ツッたあぁッ!!」

針、ハリ、はり、あつちこつち針つつ!!

「なんや？　な、なにしてるんや!？」

あゝ、あいちゃんの声がするけど目が開けらん
ない。あいちゃん、たすけてええ！

「なんちゆうか、どれみちゃんらしいなあ
みんな消毒終わったで」

ほい、

なんか、ひどいこと言われてるけど、気にしな
い。さっき真つ青になってあたしに飛びついたあい
ちゃん、見ちゃったもんね♡

「んで？どれみちゃんとはつきちゃんのおかあちゃ
んが、なんや変なんやて？」

あ、そうだった。でもあたしが口開く前に
「そうなの。わたしとどれみちゃんのママ、なにか
打ち合わせてるんじゃないかしら？」

はつきちゃんに先に言われちゃった。まあ、どつち
にしても、あいちゃんには関係ない話だけど　あ
れ？なんか考え込んでる??

「　　実はあたしとこもや。おかあちゃん、朝起
きてからあたしの顔見るたんびにくすくす笑うてん
のや。わけ訊いても『なんでもない』しか言わへん
し、な〜んや隠してる気がするんやけどなあ」

ありやりや、あいちゃんもなんだ。おかあさんた
ち、なに企んでるんだろ？そんなこと考えてたら、
いきなり、

「あれエ〜??」

って妙な声がキツチンの方から聞こえてきた。そ
ういや、今日はももちゃんまだ見てないや。

「どしたの、ももちゃん?」

あたしたちがキツチンに飛び込んだら、冷蔵庫に
顔つつこんでたももちゃんが、こつち振り向いた。

「冷蔵庫の中、何か変わってルよ?」

「そら、あんだけ詰まってるから食べ物取り出
したんやから、くずれてもうたんやないか?」

あいちゃんがそう言いながら冷蔵庫の中、のぞき
込んでる。あたしも横から見た。うん。たしかに両
側からくずれてる。けど、

「なんかこれ、奥うのほつから引つ張り出した、っ
て感じだね」

「なくなってるものって、あるのかしら?」

あたしのわきで、はつきちゃんが言った。あ、そつ
か。でも、ぎゅつぎゅつに詰まってるから、覚えて
ないなあ

「　　そういえば、ここに大きなプリンがあったよ
うな気がするけど」

おお、さすがももちゃん。思わず背中ぼん、つて
たたこうとしたら、

「プリンやて!?!」

いきなり大きな声。そのままつんのめっちゃった。

まったく、プリンがどうしたつてのよ。

でも、顔を上げたら、みんなすつこくまじめな顔
してた。

「　　ネ、あいちゃん。いま、同じこと考えてるん
じゃナイ?」

ももちゃんも。

「ん〜? まあ　そやけど、なあ。いくらなんでも、
それは止めるやろ?」

あいちゃんも。なんだか、あたしだけ仲間はずれ
だなあ。

「そつよね　　あら?」

はづきちゃんまで え？

「どうしたの、はづきちゃん？」

はづきちゃんの手が、冷蔵庫の奥のほうに入ってく

「プリンがあったところに、またメモがあるわ。

うん、とれた。なんだが、ぐちゃぐちゃな字

ねえ あ!!」

はづきちゃんの手元を見て、あたしはすぐわかつ

た。これがなんなのか。そっか、そういうことだったんだ。

顔を上げたら、みんながうなづいてる。

「ケーキに乗せようよ、これ」

メモをそっとつまんで、ももちゃんに。ももちゃんも、だいじそうに袋にしまってくれる。

「そうね。わたしも、それがいいと思う」

「そやな。ももちゃん、こっつええデコレーション、たのむでー!」

次の日は3日で、おんぷちゃんの誕生日。それにしても ふあああ〜うっう 眠いなあ。

昨日からなくんか様子が変だから、おかあさんに声かけられる前に出てきちゃったんだけど ちょつとやりすぎたかなあ？

朝のMAHO堂。うす〜いもやの中に浮かんでるのを見ると、まだ魔女界に行けちゃいそつな気がする。こんなに早く来るなんて、はじめてだもんね。

くふふ 一番乗りかあ。ちょつと、面白いかも

みんなで決めといた通り、ポストの中からカギとつて あれ？ カギがない。ってことは

「あ、どれみちゃん、おはよう」

ドア開けたら、はづきちゃんが、いる。

「なんや、早いなあ。もつと寝ててもかめへんに」

キッチンにあいちゃんも、いる。

「ふたりとも、なんでこんなに早いのか？ あたし、一番だと思っただけに。」

あたしが指さしてる前で、はづきちゃんが苦笑い。

「ええ、なんだか家にいると、ママがべたっ、ってくっついてくるのよ。」

「あたしもや。ずっとニヤニヤしっぱなしやから、な〜んや居づらくなってもうてなあ。」

タオルで手ふきながら、あいちゃんもこっち来た。なんだ、みんなもそうなのかあ。ホント、なにたくらんんだか。

「ま、いつか。せつかく早く来ちゃったんだし、もちちゃん来るまでに、片付けちゃおっか。」

「そつね。あ、どれみちゃん。テーブルクロスはいいのがないから、ピースで編むことにしたの。手伝ってね。」

にこここしてるはづきちゃん。だけど、ピースっすか？ もつ機械ないから手編みなんすけど、あ、

だめだ。メガネ光ってる。あいちゃん〜ん

「さーて、っと。あたしはちゃっちゃんと料理つくらんとなあ〜」

ああ、たのみのあいちゃんが行っちゃおう。

「ん〜、ケーキは最後に焼くんやろうから、それまでにオーブン使うもん作って、ありや??」

あいちゃんが止まった。まんまるく開いてる目のさき見てみたら、いつの間にかドアが開いてて、

「おはヨ〜」

って、ええっ？ ももちゃんまで、なんでこんな早いのか!?

「お、おはよ、ももちゃん、どしたの?」

あたしのとなりで、はづきちゃんがいつしよにコケた。だあ〜、もつ、腕ぐみして、首かしげながら『ん?』って言われてもなあ。

「なんかネ、ママがヘンなんだよ。」

え?

「変つて、ももちゃんどこまで!?!」

起き上がったて聞いてみたけど、ももちゃんまだ首かしている。右に、左に。

「うん。昨日の夜もず〜っとなんか探しててネ。いきなり『あつたあ〜』なんていうカラ行つてみたら『なんでもない』ってこまかすシ。

出かけるとときダツテ、『がんばつてね〜!』だつて。なんなんだ口?」

う〜ん つてみんな腕組みしてる。気がついたらあたしも腕組みしちやつてた。間違いない。おかあさんたち、みんなしてな〜んかたくくらんでるよあ。「なんかさあ、もう、バリケード欲しくなってきたよ」あたしが思わずつぶやいたとたん、あいちゃんが吹き出した。つられてみんなも大笑い。つて、あたしはマジなんすけど。

「まあ、言いたいことはわかるけどな。気にしててもしゃあないやん」

くちびるとがらせちやつたあたしの肩を、ぼんぼ

んつてあいちゃんがたたいた。そだね。いま考えてもしょうがないか。

ふう、つて息ついて気をとりなおしてたら、

「それじゃ、準備早く終わらせて、おんぶちゃん来るまで一休みしましよ。」

目の前に、ピースを山ほど抱えたはづきちゃんが迫つてきてる。はあ、昼までに終わるかなあ?

「でやあつはあ〜 やつと、終わったあああ」

テーブルにつつぶしたとたんに、ぼん、つて時計が鳴つた。目だけそつち見たら うあ、もう3時じゃん。あんだけ早起きしてこれかあ。

「どれみちゃん、お疲れさま。それじゃ、わたしはちよつと買い出し行つてくるわね」

いってらっしや〜い、つて頭の中で言いながら、あたしは手を振つた。も、声も出ないよ。

でも、はつきちゃんタフだなあ。カーテンもティーブルクロスも、あたしちよこつとしか手伝えてないし。こんどは買出しなあ　ああ、さつきりボンが足りないとか言っ

ぐるるうううう

「おなか、すいたなあ」

そっぴや、朝出てくるとき食べたつきりだっけ。これじゃパーティーまでもたないよ。

どっかになにか　ん？　うわあ、いいにおいがする♡　いったいどっから、って、キッチンに決まっているか。あいちゃんたち、お料理作ってんだもんね。なんで今まで気づかなかったんだろ？

ああ、足が、勝手に歩いてっちゃんうよ。

はつきちゃんには悪いけど、先たべてよっかな。へへ、おしょうばん、おしょうばん、っと

キッチンに入ったら、あいちゃんの後ろ姿。あれ

？ももちゃんいないんだ。

テーブルの上には、シュークリームがいっぱい　ケーキはこれからのかな？

ま、いつか。それよりあいちゃんの方だ。あれだけ冷蔵庫いっぱいなら、きつと

「ねえ、あゝいちゃあゝ♡」

エプロン姿でフライパン振ってるあいちゃんの肩に、めいっばいの声出してあごのっけたら、

「ステーキやったら、ないで」

あごがずるっ、と落ちた。ええええ！？　そ、そんなあ。こんだけ、こんだけ食べ物いっぱいなのに、いっぱいなあのおにいいい〜

がっくり床にへたり込んでると、上から、くくくっ、って笑い声。もう！　ひとが落ち込んでるってのに！

「しゃあないやん。冷蔵庫にあんだけぎょうさん食べもん詰まってるんに、ステーキ肉のスの字もあらへんねや。」

「氣いついたときは、思わず笑ってしもたわ」
くっそあ、マジヨリカだな!

「まあ、そつ怖い顔せんと。今日はおんぷちゃんの誕生日なんやから、おんぷちゃんが優先や。あまりの野菜でチャーハン作つといたから、それでもつまんどぎ。な?」

ん、それ言われるとなあ。でも

「でもなあ、つぎのあたしの誕生日は、ひとりなんだよねえ」

あはは、つて笑いながら　は言えなかつた。口
のわきが、ひくひくいつてる。目の前が、すこしに
じんで　うあつ!!

「あたたたたたツツ!」

いきなりあたま抱えられたと思つたら、ぐりぐり
ぐりつって!

「いた!痛い! あいちゃん、ちよ、痛いって!」

「まゝたそんな言うからや。もう」
ぐりぐり、はやめたけど、まだあたま抱えたまん

まで、あいちゃんがため息ついてた。

「心配せんでも、またぎょうさん友達できるわ。どれみちゃんやつたら」

あたしは、あたまなぐられたような気がした。あいちゃんが、こんなこと言うなんて

思わず突き飛ばそうとしたら、その前にくるつ、と背中にまわつてぎゅつて抱きしめられちゃつた。

「せやけどな、どれみちゃんは、あたしの大親友や。あたしも、どれみちゃんの大親友や。これからどんな友達できて　また会ったときには、やっぱり大親友のまんまやて。あたしは、信じてるで」

背中に、熱いのが広がってく　と思つたら、いきなりぱつとなくなつた。

「あつかくん!」
「ゴゲてまっやんかあ!!」

なんにもなかつたみたいに、あいちゃんまた料理してる。あたしはそあつと近よつて、背中にかお埋めてみた。あはは、どきどきいつてるよ。

「わかった。あたしも、信じる」
 チャーハン持ってキッチンから出る途中、ちよつと振り向いてみる。真つ赤になったあいちゃん、フライパン振ってた。

「ただいまあ」

あ、はづきちゃんだ。ずいぶ遅かったなあ、もう5時近くじゃん。

まあ、カーテンかけてテーブルクロスひいてただけだから、あたしもひとのこと言えないけど。

「遅くなってごめんね。帰りがけにおんぶちゃんのおうち、ちよつと見てきたわ。」

おうちのパーティ、いまさつき終わったみたいよへえ、そっか。もうそろそろなんだ。

あれ？なんかはづきちゃん、出てったときと違うみたい。ん〜と あ、そっか。光ってるんだ。

「はづきちゃん、くちびる、なんかつけてるの？」
 「え？ あ、やだ」
 ポケットからハンカチ出して、「ごしごし。ふき取ってる？」
 って、「ごし」

「ああ〜っ！ はづきちゃんずるい！ おんぶちゃんちのパーティ行ってたんだ!!」

「え？ あ、その パパがお呼ばれしててね、わたしがちょうど通りかかったから、連れてかれちゃって きゃー！」

クンクン、クンクンクン。はづきちゃんの口もとから匂うこれ、いい匂い !!

「おまけに、おまけに ステエ〜キいいい」

「ご、ごめんなさいっ!!」
 ステーキ、すてーき、すてえき、すううてえええきいいい〜

パコン！

あたたっつ！

「どれみちゃん、さっきあたしのチャーハン食うてたやんか。はづきちゃん待たん」と

「たあ〜！ あいちゃん、ぶあついおぼんで叩かないでよあ〜！」

「シャンシャン！」

「あてっ、いててっ！」

「シユークリームも、こっさりツマンでたヨネ？」

「ううう、なにも泡だて器で叩かなくなっって」

「もう！ 数が足りなくて、焼きなおしになっちゃったんだカラ！」

「あちゃ。ももちゃんがじとあ〜、ってこっち見てる。」

「いや、その、い〜っぱい焼いてたから、ちよっと」

「ひとつ」

「ひとつ!?!」

「あ、目がこわい。バレ てるよね、やっぱ。」

「ひとつ のつもりだったんだけど、おいしくっ」

「で、その ふたつ、みっつ、って」

「ぼんぼん、って、肩たたかれて振り向いたら」

「はづきちゃん？ めがねが」

「ど〜れ〜み〜ちゃ〜ん〜ん〜ん〜？」

「光った！ うひいっ!!」

「あ〜、え〜っと ごめんなさい」

「あたまたげたとたんに、みんな大笑い。ぶう！ な」

「んか、あたしばっか損してるような気がするなあ。」

「遅くなっちゃったけど、リボン買ってきたわ。ふち飾りしてできあがりよ」

「あたしの方も、料理のしたく終わったで。あとは」

「おんぶちゃんのかお見てからや」

「ああ、そっか。もつおんぶちゃん来ちゃうんだ。」

「あ、あれ？」

「あ、あれ？」

「そう言えば ももちゃん!?!」

「ん？」

「ケーキ！ 早く焼かなくちゃ!!」

「あれ、ももちゃんといいちゃんが、顔見合わ」

せて笑ってる。なに？

「ケーキなら、できてんで」

へ？

「で、でも、もちちゃん今朝からずっとシュークリームばっかじゃん。ケーキなんていつ」

「あ、わかった」

あれ？はづきちゃんが、手をたたいてにこにこ。わかんないのあたしだけ？

「まあ見たらわかるわ。ほな、そろそろ運ばか？」

あいちちゃんがキッチン行って、しばらくしたらキッチン

のほうから山が来た。

山！

「なに、これ？」

山。運んでるあいちちゃんがかくれちゃうくらい、おっきな、山みたいなケーキ。どうやって焼いたんだろ！

そっつとテーブルに置いたところをよく見たら、

小さなゴツゴツしたのがアメでくっついてる。あ！

これ

「シュークリームのケーキ!？」

もちちゃんが、うんうん、ってうなづいてる。

「クロカンブッシュっていうよ。いちど作ってみたかったんだケド、材料も時間もいっっぱいナイとできないの」

うっひゃあ やっぱもちちゃん、すごい。

ちよつと、ぼけつ、としてるうち、あいちちゃんが料理並べてるし、はづきちゃんはテーブルクロスにリボンつけてた。

いっけない。あたしもなんか手伝わなきゃ！

カランカラン

MAHO堂のドアにガムテープで貼りつけたベル

が鳴った。　　なんだかんだ言つて、あたしが手伝
えたのつてこれだけかあ

だめだめ、落ち込んでる場合じゃない。テーブル
の周りに集まつてたみんな、いっせいにドアのほう
を向いてクラッカーにぎつてる。あたしもにぎつて
せえゝの！

だれも入つてこない。ありやりや？

「What?」

「なんや？ おんぶちゃんとちやうんか？」

ももちゃんたちが首かしげてる。あたしが首だけ
ちよつと伸ばしてよく見てみたら、なんか動いてる
のが見えた。

びよこん、びよこんつて、髪の毛のたば。

「やっぱ、おんぶちゃんだよ」

なにやつてんだろ？ 立ち上がつて、ドアまで迎え
にいったら、ちよつとドア閉めたところだった。

「ふう」

おつきなバッグにもたれかかつて。ひとつため息。

なんだ、バッグの車輪が引つかかつちやつてたんだ。
言つてくれればいいのに。　　だけど、気になるなあ。

「おんぶちゃん、なに、その荷物？」

腰くらいまであるバッグに、なんかいっぱい詰まっ
てるみたい。なんだろ、横からちらつと

「ふふ　まだひみつよ。奥の部屋においとくわね
のぞいちゃ、だめよ」

うゝん、なんであたしにだけ言つかなあ？ もつ、
みんなクスクスわらつてるしい。ほんとにのぞいちゃ
うぞ。

「ごめんごめん。どれみちゃんはもちろん、のぞい
たりしないわよね？」

ちらつと　のぞけないなあ、これじゃ。いつもだ
けど、やっぱ、おんぶちゃんにはかなわないや。

「おまたせ。じゃ、はじめましょ　きゃー！」

奥の部屋から戻ってきたおんぶちゃんに、こんどこ

スクラツカーの雨！ おめでとうの言葉がとぎれたところで、おんぶちゃんが目がやつぱり山に向いた。

「すいいでしょー！これ、ももちゃんが作ったんだよー！」

Vサインしてるももちゃんと握手して、

「料理はみくんなあいちゃんー！」

力こぶ作ってるあいちゃんに親指立てて応えて、

「飾りつけは、はづきちゃん！きれいでしょー！」

にこにこ笑ってるはづきちゃんに手を振って、それから一言。

「ごれみちゃんは？」

あちゃ。それ言われるとなあ

「あたしは、ただ、ちよこつと手伝ってただけだよ」

だれもフォローできないもんね。あはは あは！

おんぶちゃん、いきなりあたしの手首つかんで、

「だったら、わたしのも手伝ってくれるわね？」

え？え！？そのままあたし引きずって、奥の小部

屋に連れてかれちゃったあ！？

明かりつけても薄暗い部屋。引つ張ってきたあたしを置いていて、おんぶちゃんがカバンの中をこそそやってる。

「あのおく、おんぶちゃん？」

ちらつ、とこつち見たけど、またこそこそ。あ、

あ、やつぱり、かな。

「やつぱ、おんぶちゃん、怒ったよね」

「なにが？」

ああ、言葉が痛いよ。しかたないか、あたしだけ

「あたしだけ、なにもやってないんだもんね。おんぶちゃんのために、って、みんながなばって」

むにっ

へ？

一瞬なんだかわかんなかった。けど、気がついたら、ほつぺたが痛い

「いはははは！ ひよっほ、ほんふひゃん！」
 がおがのびてる！ くにく〜って！ くにく〜ってっ！！

「来たときから、なんか変だと思ったのよね。こおらー！」

いたたたた ああ、ほつぺたちぎれちゃうよ。って、なでてたあたしの前に、おんぶちゃんの人差し指がのびてきた。

「パーティーMAHO堂でやるう、って言ったの、どれみちゃんでしょ？」

いって ん？ あたしが、なに？ ああ、おんぶちゃん、ため息ついちゃってるよ。

「やつぱりわかってないんだから
 い〜い？ どれみちゃんは、MAHO堂の思い出を

くれたのよ？」

はい??

「昔に戻っちゃったMAHO堂でパーティなんて、気持ち悪いに決まってるじゃない。ふつうは。

でもね、どれみちゃんが『やるう』って言うとなんだかとてもステキな場所に思えてきちゃうのよ」

いや いきなりそんなこと言われても って、
 うあー！ おんぶちゃん、突然あたしの手をにぎって、
 がお近づけてきてるよ！

「だから、ね。どれみちゃんのちから、もちよっと貸してほしいな。

みんなの思い出になるもの、まとめて持って来たから。ね。ね。」

うう〜、うるうるの上目づかいて おんぶちゃん、それ反則だよお〜

う〜、なんか、動くときツいなあ

服をあっちこっち引っ張ってたら、おんぶちゃん

が見に来た。

「キツイ？ サイズは合ってるはずだけど　そう
ね、新しいし、もともと硬い生地だからしかたない
わ。　さ、いい？」

よおし、行ってみよう！

「おまちどうさま」

おんぷちゃんが開けたドアの先に、テーブルでぼ
くとしてるみんなが見える。つまんなそうな顔して。

「ああ、もつ、主役がおらんでごない　え!？」

「Wow!」

おんぷちゃんに続いてあたしが並んだら、みんな
目がまんまるくなってるよ。おんぷちゃんがクスク
ス笑う気持ち、なんとなくわかるな。

「それ、遠近学園おんちんくわんの制服ね？」

「そうよ。どつどつ？」

おんぷちゃんが、くるっ、と一回転。あたしもま
ねしたけど、ちよっとぶらつくなあ。あはは。

「ええ！ うん、ほんま、かつこええわ！」

「カッチリしてるけど、かわいい♡」

「この前まで着てた見習い服みたいダネ！」

おお！　そっか。なんか着たことあるような気がし
たんだ。これでぼうしあつたら、見習い服じゃん。

「ふふ。気にいってくれたみたいね？」

おんぷちゃんが笑いながら、背中にかくしてたカ
バンに手を入れた。あたしは、窓とカーテンすばや
く閉めて回る。

「じゃ、みんなもね」

カバンから取り出したのは

「「え!?!」」

もちろん、遠近学園の制服が三着！

「あ、あははは　ピッタリやんか」

「わたしも　ちようどいいわ」

「わたしもダヨ。Why?」

やっぱみんな、すっこく似合ってる！

けど、

「ねえ、おんぶちゃん。みんなこんなにピツタリつて、なんでわかるの?」

こっそり聞いてみたけど、おんぶちゃん、ふふふって笑っただけ。

なんていうか、さすがだよねえ。もつ。

「みんな遠近の中等部に入ったみたいやなあ」

あいちゃんが、スカート気にしながら笑ってる。みんなも横でうなずいてる。

そっだね。いっしょの中学だったら、きつとこんな風だったんだろつな

「みんな、着たわね?」じゃ、ケーキの周りに集まって

じゃ、撮るわよ」

窓ぎわに置いた三脚の上のデジカメから、ピツ、ピツ、ってタイマーの音。どんどん早くなってくる音を聞きながら、あたしは、ちらつとみんなを見てみた。

はづきちゃんがいる。あいちゃんがいる。おんぶ

ちゃんがいる。ももちゃんがいる。

みんな同じ制服で、ひとつの写真のなかに入るんだ。

「思い出、かあ」

つぶやいた瞬間に、フラッシュが光った。

「ふう。それじゃ、汚さないうちに着替えよつか」

写真撮り終わって、ひと息ついているところ。ちょっと暑くなってきたから窓に近づいていったら、

「あ、まだカーテン開けないで」

おんぶちゃんの言葉に、みんなが振り向いた。おんぶちゃん、またカバンの中さがしてる。

「ゴソゴソ、ゴソゴソってやってるのが、ぴたっ、と止まったと思ったら、こっち向いてにっこり。なんか、いやゝな予感

「イツツシヨウタイム」

手に持つてるのって、ちよつと、それ!?

「青空中の制服!?!」

「カレン女学院のも!?!」

「あたしの中学もあるやんか! おかあちゃんがわざわざ見せに持ってきてた ああっ!!」

そっか、おかあさんたちがニヤニヤしてたのって、これかあ!!

「ももちゃんだけは制服がないから、ももちゃんのママの制服ね」

なんだか、気が抜けちゃった。おんぶちゃん、用意よすぎだよ

中学の、制服かあ。なんか、照れくさいな。みんなもそうみたい。制服じつと見つめたり、かお埋めたりしてるよ。

「また写真撮るから、早く着替えてね」

はいはい。ちよつと硬い遠近の制服脱いで、青空中のスカート着てみたら、足に当たるすがやつぱ硬い。さいしょはみんな、こんなもんなのかなあ。

リボンむすんで、上着はおって よし、と。

振り向いたら、みんなが違う制服になつてた。

茶色のブレザー着たはづきちゃん。

チエックのスカートはいたあいちゃん。

セーラー服姿のももちゃん。

紺色ジャケットのおんぶちゃん。

そして、紺ブレザーのあたし。

みんなの中学の、みんな違う制服。なんだか、みんな知らない人みたいだな。

さつきと違つ、もつひとつの思い出の写真か。ほんとだったら、ここにもつひとり あ。

「ちよ、ちよつと待つて」

おどろいてるおんぶちゃんの前で、あたしは脱いだばかりの制服を手に持つた。

「ももちゃん、あのメモ、お願い!」

「メモ? Yes!」

ももちゃんがおんぶちゃんに、あの冷蔵庫のメモ

見せてる。きたない字のメモ。ひとことだけ『おんぶ おめーと』って書いてある

「これ ハナちゃん!？」

うんうん、つてうなずきながら、ももちゃんがおんぶちゃんにメモ渡した。

そっか、そだね。みんな、わかるんだ。

はづきちゃんが、クロカンブツシュに紙巻いてくれた。

あたしがその上から遠近学園の制服着せると、あーいちゃんがアメをちよつとたらしめて、おんぶちゃんが、あのメモを貼り付けてくれた。

「おんぶちゃん、主役なんだからハナちゃんのそば、もつとくつついて」

ほら、みんな、わかってくれてるよ。

「あいちゃん、リボン曲がってるよお」

違う制服でいいじゃん。

「ももちゃん、スカート長すぎー!」

おんぶちゃんの言うとおり、きょうはみんな、

「じゃ、いくよお! みんないっしょに!!!」

イツツ・シヨウタイム!

— おわり —

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしく願いいたします。

追記：私の書く文は、条件付きですがコピー可です。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。